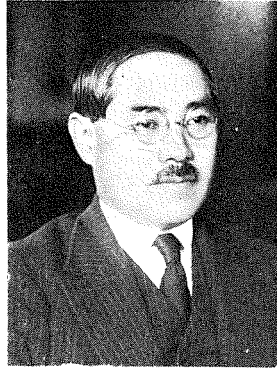


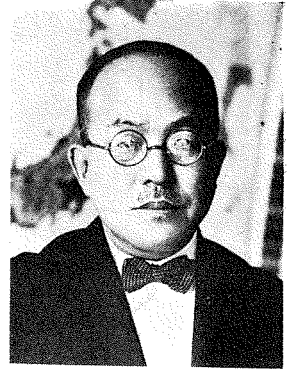
# 鐵道省 の 異動

1



工務局長

平井喜久松氏



建設局長

河原直文氏

## 工務局長 平井喜久松氏

工務局長平井喜久松氏は先年本省の改良課長から東京改良事務所長となり、今度工務局長となつたのであるから、行き方が恰度河原建設局長と似て居る。

平井氏は後藤佐彦氏が工務局長時代に其改良課技師として東京附近は云ふまでもなく、全國樞要な改良計畫の立案者として之に精通してゐるので、今日の工務局長としては全くの適任である。

平井氏は明治四十三年の東京帝國大學土木科出であるから技術家局長としては若手の方である。若い丈けに局長としての手腕を危むものもあるが、それは氏が我國鐵道界の元勳の一人たる平井晴次郎博士の次子であり、且つ今日まで比較的無風地帯を進んで來た事と、昨年工學博士の學位を得た……と云ふ一學究として見るからであつて、其上、氏の寡言、清廉、而して嚴正なる官僚的態度等を誤解するに依るものである。

工務局長は必ずしも營業局長ではないから、平井氏の如きは全くの適任であり、日本の鐵道は今後益々技術的發展を遂げるものと思ふ。

## 保線課長 井上隆根氏

保線課長井上隆根氏は今回の鐵道省技術官の大異動中で最もの若手である。大正五年の京都帝國大學土木科出であるから異常の拔擢と言ふべきである。それ丈け今回の鐵道異動は一點情實を交へざる眞の實力主義に出たものである。

日本の保線技術が今日の如く進歩發達した事は所謂無名の戰士とも言ふべき様の下の力石で一生涯を捧げてゐる多くの現業員の質實なる力でもあるが、上に能く之を統制して其努力を研究化し、之を指導す

るの頭腦が缺けてゐたら、何等的發展も價值も出ないであらう、幸にして保線課には良き技術家が揃つてゐた。井上隆根氏は此點に於て今や日本の保線技術を代表する第一人者である。勿論井上氏が今日を築き上げる迄には日夜孜孜として倦まざる研究的努力の結果である。井上氏は保線課の多くの現場資料を統轄し研究して、常に『明日に處する最善の技術』を編出せんと努力してゐる人である。井上氏の行住座臥はすべて是れ保線である。其態度の餘りに熱心なるが爲に稍もすれば不良の徒から中傷さへうける然し人生の事毀譽褒貶に惑はされて唯一人の自己を平安に保たんとする様では權威も何もない。

天は成すべき人には多くを與へるものである。今や保線課長としての井上氏に與へられた日本の鐵道の使命は大なるものがあると思ふ。

## 建設局長 河原直文氏

建設局長河原直文氏は先年熊本建設事務所長から出て本省の工事課長となつた人である。然るに何んな理由であつたか一春年東京建設事務所長の竹殿一郎氏と入換つて東建所長となり今日に至つた。

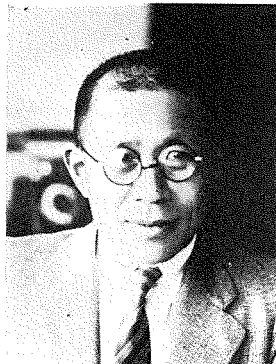
今回東建所長から一足飛に建設局長になつても不思議のないわけである。

河原氏は明治四十一年の京都帝國大學土木科出である。京大出の技術局長は東京市役所の近土木局長原水道局長などあるが、鐵道省としては最初である。

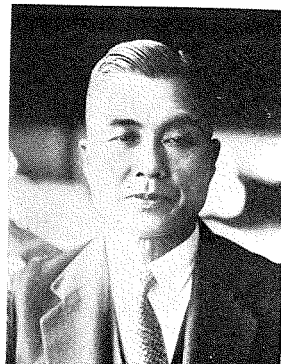
建設局長の椅子は政治的勢力の最も錯雜した處で異動も早い、それだけ鐵道省としては重要な位置になつてゐる様だ。河原氏の局長は此點公正なるもので從來にない明朗なものだ。



保線課長  
井上隆根氏



工事課長  
平山復二郎氏



信電所長  
釘宮馨氏

河原氏の温厚なる風貌は能く人の長者としての徳望を表現してある。此點は恰も黒河内工務局長と似通つた處のある様に思はれる。然し仕事の點に於ては建設局は工務局よりも複雑してあるから徳望一點張りでも行けない、多士濟々の建設事務所長や若手技師をして適材適所に良く其職分を達成せしむるには相當の苦心を要する事と思はれる。

### 工事課長 平山復二郎氏

工事課長平山復二郎氏は風彩や外見には殆んど無頓着である。外見などに執はれないから何事に對しても事物の眞實をつかまんとする態度は技術家としての最もなる適性である。

平山氏は明治四十五年の東京帝國大學土木科出であるから、今迄の課長に比べると若い方で、先づ新進拔擢の方である。最も今度の喜安次官なども四十五年の帝大出であるから平山氏等と同年出である。工學士と法學士とは是丈遅速がある。そこに技術家と言ふものの特異性があるのかも知れない。

平山氏が技術家として思ふ存分に腕を振ふたのは大震災後の復興局土木部に入り故太田三氏の下で帝都復興の道路工事に努力した頃であらう。特に混凝土工事に關しては先覺的に努力して日本の混凝土工事に幾多の刺戟を與へたものである。

復興局の事業が終ると直に鐵道省に復歸して建設局工事課に在つて故池原英治氏が計畫課長に轉じた後を引繼いでゐたが、間もなく川口愛太郎氏の後を襲ふて熱海建設事務所長となつた。熱海建設には世界的な難工事たる丹那隧道がある。平山氏の如き徹底した技術家が此處に所長たる事は全く適任である

然し此時はさすがの丹那發道工事も殆んど貫通の目鼻が付いてゐたので、別段に平山氏の技術的の手腕を振ふ餘地はなかつた。

今や平山氏は工事課長として、あの活眼を全國の建設工事に如何に働かせることであらう。

### 信濃川電氣事務所長 釘宮 馨氏

信電所長釘宮馨氏は熊本建設事務所長から轉任したと言ふ丈で、別に重要な異動でないかも知れない。然し今や全國各建設事務所の工事を見渡すと左程重要性を帯びた大工事と言ふ程のものが見當らない、翻つて信電工事を見るに、鐵道省としては全く不馴れの水力發電工事であり、然も信電工事は今後本質的に重要期間に進み、且つ第二期第三期工事と莫大な工事を控へてあるのであるから、他の平凡なる建設工事と同一視出来ないものがある。爰に釘宮氏の轉任を必要とする重大意義がある。

釘宮氏は平山氏と同様明治四十五年に東京帝大土木科を出て鐵道に入つたが、故太田三氏に率ひられて大震災後の帝都復興局に入り、土木部隅田川出張所長として隅田川六代橋工事に没頭した事は今尙ほ世人の記憶に新なる處であらう。復興局の大工事を終ると直に鐵道省に復歸して、名古屋鐵道局の一工事たる木曾川下流の關西線架橋改良工事の一主任として赴任其後熊本建設事務所長に轉ずるや、其所に於て混凝土施工法の改善や多數の特殊工法實施研究を完成し大熊本建設に技術的新生命を旺盛せしめた功績は偉大なるものがある。今や信電所長として再び北越の大工事に釘宮氏の勞を待つ事となつた。積雪丈餘の山間に於て特に加餐を乞ふものある。